

東武沿線に輝く孤高のまち

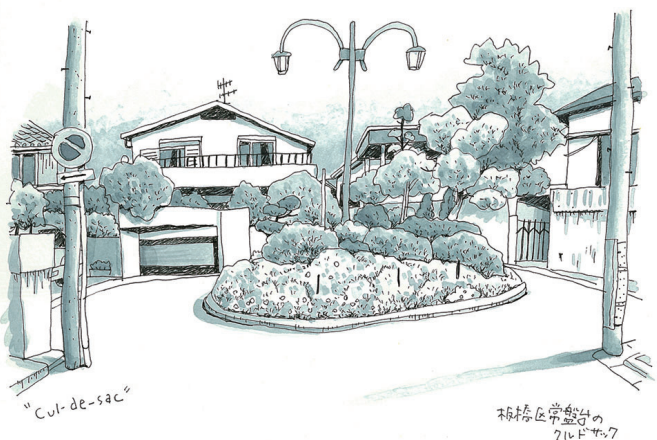
板橋・常盤台住宅

「あら、感じのいい所ね」「道のつくり方が面白いわ」「この沿線にもこんな素敵な住宅地があったんだ」。新婚時代、近所を散歩しながら、そう妻がつぶやいた。

幅8m程度なのに中央分離帯があり、そこに並木が続く道路「プロムナード」。真ん中に丸い緑地の車返しがある行き止まり道路「クルドサック」。随所から幅1m程度の狭い通り抜け通路「フットパス」。随所にこんなまちづくりの仕掛けがあるのが、池袋駅から5つ目のときわ台駅で、その北口を少し歩くと、東武さんには失礼だが東上線沿いにもこんなつくり方をしたまちがあるのかと感心してしまう住宅地だ。

昭和初期の有名な田園調布開発からは10年後らしいが、東武鉄道が直接手がけ、大げさに言えば日本の郊外住宅地開発史に残る常盤台住宅地である。クルドサックやプロムナードは今に残る特徴だ。

私は東京の南西方面で家賃10万円、2DK、RC造、会社へ30分の立地で新婚生活スタートのまちを探していた。中央線や小田急線、京王・井の頭線では見つからず、



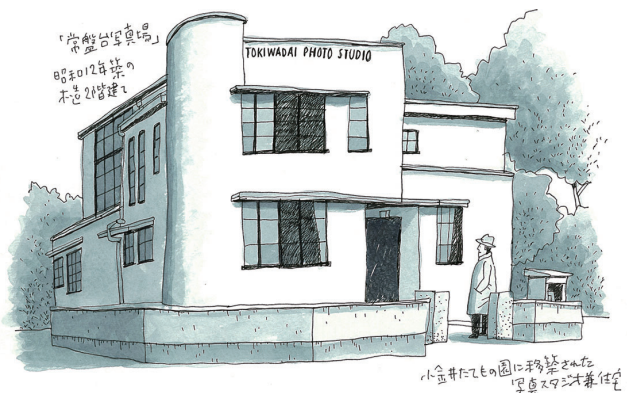
西武新宿線・池袋線へ北上、ついには東武東上線へ。諦めかけていた時にありました。希望の物件が。同じ方面の沿線より東上線沿線は家賃相場が安いイメージだったが、こんな高級感漂う住宅地近くの南常盤台で見つかったのである。

実はこの住宅地のことは、建築の学生時代に都市計画の授業で少しだけ知っていた。イギリス人のハワードが20世紀初頭に著した理想都市論『明日の田園都市』と、そのアメリカ版としての近隣住区論と実践版であるニュージャージー州のラドバーン開発。

そこでは歩車分離の都市構造を目指してクルドサック道路を取り囲む広い敷地の住宅

群がつくられた。その流れをくんだ住宅地開発が常盤台にもあったこと。専門誌によると、当時の内務省官房都市計画課の技術掛に配属間もない23歳の技術者が、現地も見ずに設計した案が採用されたとか。無名の一技術者の設計提案が実現したのは驚きで、まちづくりに関わる技術者としては実にうらやましい話だ。

さて、常盤台で生まれた息子も成人し、あつという間に四半世紀が過ぎた。そうだ、近いうちに家族で懐かしの常盤台へ散歩に出掛けてみるとするか。(和田 秀司)



僕の「街の本屋さん」

埼玉・行田

男性ファッション誌として有名な雑誌『POPEYE』で、「君の街から、本屋が消えたら大変だ！」という特集が組まれていた。これまでほとんど手にしたことがないし、年齢的にもう縁がない雑誌と思っていたが、もとより本が好きで、それに最近、目白にあった本屋さんが惜しまれつつ閉店してしまい、まさにその「大変な事態」を目の当たりにしたばかりなので、この「特集」のタイトルにがすく気になってしまった。

頁をばらばら捲りながら「街に本屋さんがなくなること」を「大変だ」という感覚が、いま世間的にどの程度共有されているのか心許ない気にもなったが、特色のある本屋さんが色んな切り口で紹介されていて、とても楽しめる内容だった。

そう言えば僕にも、実家にいる時は思い入れのある本屋さんがあった。地下鉄南阿佐ヶ谷駅を降りてすぐの「書原」だ（残念ながらここも2017年2月に閉店。50年の歴史に幕を閉じた）。初めて自分で小説を買ったのもこのお店だと思うし、つい最近まで実家に帰れば立ち寄ることも多かったもので40年近い付き合いがあったわけだ。細長い店内に一歩足を踏み入れると、不思議なくらい買いたい本が次々に出てきて、何かわくわくするような空間だった。

今は本屋と言えば大型ショッピングセンター内に併設された書店しかない地域に住んでいるわけだが、最近、ひょんなことから「街の本屋さん」ともいうべきお店に巡り合うことができた。行田市の忍城（おしじょう。映画『のぼうの城』でちょっと有名になった）近くにある「忍書房」だ。

お店は国道沿いに何軒かの古い商店が並ぶ一角にあり、いかにも長く地域に愛されてきた「街の本屋さん」といった風情である。大量に本が置けない分、書棚には店主の吟味の跡が見られ、僕は本屋で本を眺めているというより、ここのご主人の自宅の本棚を見せてもらっているような感覚になってくる。今ではご主人と何かと本にまつわる話をするのも楽しみの一つになった。自宅から車で10分くらいかかるので、正確には「僕の街の本屋さん」というより「僕の『街の本屋さん』」といったところか。これからも永くお付き合いしていきたいものだ。（小谷 喜典）

